

【実践報告】

海外の日本語学習者に日本文化をどう教えるか  
—アクティブラーニングを取り入れた授業の試み—

How to Teach Japanese Culture to Overseas Japanese Learners  
—Practice of Active Learning Method—

高 寄 幸 子\*・都 恩 珍  
Sachiko TAKASAKI, Eunjin DO

This study is a practice report of the cultural classes conducted for overseas students of the Japanese language through the active learning method. In recent years, the importance of cultural education has been emphasized in the Japanese language education. Along with that, not only in Japan but also overseas, it aimed to shift from unilateral teaching method to active learning method. In this paper, we attempted to devise cultural classes where students were able to actively. The target students selected for this study were students in the Department of Japanese Language in Bali, Indonesia. Because Indonesia is known to have many Japanese language learners in the world and they have a high interest in Japanese culture. The classes adopted five themes: country introduction, language, seasons and annual events, cities, and culture. These classes were devised according to five principles: participation and interaction, creation of thoughts through the comparison of Japan with the students' home country, shift the focus of students' to their environment, alternation of group activities and teacher lectures and the creation of further opportunities that enable students to express themselves in Japanese. As a result, the majority of the students were able to increase their output in Japanese. And the students' attitudes toward classes changed actively. Furthermore, students were able to express their opinions about their culture in Japanese. Of course, the curiosity of the students' Japanese culture became more vigorous. I believe these practical classes are beneficial for the training of local non-native speaker teachers.

**Keywords:** Japanese cultural classes, Active Learning, Indonesia

## 1. はじめに

近年、海外の人々の日本文化に関する関心が高まりつつあるのは言うまでもない。当然、日本語教育分野においても文化教育の重要性が提唱され、議論されてきた。本稿では海外の

---

\* 桜花学園大学人間文化研究科地域文化専攻2年

日本語学習者に日本文化をどう教えるかについて考える。日本の国外にいる学習者の場合、日本の事情や文化を情報として学習することはできても異文化コミュニケーションのストラテジーとして理解することは容易ではない。この点を踏まえ、2章では先行研究を取り上げながら海外の日本語教育における日本文化の捉え方について紹介する。3章では日本文化教育についての本稿の視点を述べ、4章ではインドネシアの日本語教師の事例を取り上げ、より有効な日本文化教育の実現のために日本語教師に求められるものが何かについて考える。そして、5章ではアクティブラーニング<sup>1</sup>を取り入れた文化授業の実践を報告し、その学修効果について検討する。

## 2. 海外の日本文化教育

日本語教育における日本文化教育は早い時期から日本事情という名称で日本国内の留学生教育の科目名として使用された。教師が日本文化をどのように捉えるかによって日本事情の教育内容は様々ではあるが、最近では言語教育の一環として日本人の行動様式や生き方、習慣、気候、風土、ものの見方などの特徴を紹介するタイプから多様的で動的なものとして捉える教育に重点が置かれるようになってきた。日本国内の日本語学習者は日本語の上達につれ、次第に日本の事情や文化を体験し、自文化との違いや類似点に気づき、戸惑いながら理解を深めていくことが多い。問題は海外の日本語学習者の場合である。もちろん、グローバルな情報社会である今は海外にいながら日本文化に関する知識や情報を手に入れることはさほど難しくなくとも知れない。しかし、それはバーチャル・リアリティによるものがほとんどで、一方的な情報吸収に過ぎず、異文化理解の面で有効であるとは言えない。

海外の日本語教育において日本文化がどのように取り入れられているか。ここでは、先行研究を踏まえながら述べていく。

松岡（2012）は、香港の大学では日本文化教育が言語教育に付随する科目として位置づけられているというより、言語スキルをベースとして行う地域研究の科目として設置されており、伝統的な日本学と実用性重視の教育に分けられて日本研究がされているが、いずれも知識を詰め込むよりも学生自身が問題を発見して探求していく形の学びが強く要求されていると報告している。

一方、同じ中華圏であっても中国は香港と異なる状況である。河野（2010）の上海の大学の調査結果によると、日本国内の「日本事情」に相当する「日本概況」や「日本文化」が文化教育の主流であり、歴史、地理、風俗、政治、経済などの資料の文章中の日本文化の説明を通して中国の文化と比較しながら理解を深めたり、日本人のコミュニケーションスタイルの知識を教えたりするタイプの文化教育が現状であると報告している。しかし、教科書や教材の古さを問題として挙げていて、教師は日本人の考え方、生活様式、日本の象徴を教える

のに教材選びや作成に苦労しているという。

韓国では、日本語教育における文化理解の重要性が指摘されていながらも文化重視の教育方針がやや特別な意味合いを持つ。長年政策的に日本文化の輸入が禁じられていたため、カリキュラムに体系的な日本文化の授業が組み込まれておらず、逆にこのことが理由で香港や上海の大学に比べて日本文化に関する授業が多様化している。例えば、三代（2012）によると、学習動機を支えるポップカルチャー、コミュニケーション能力の向上のための日本文化、就職に繋がる日本文化などが文化授業の中心を成している。

北村（2011）は欧米圏の日本文化教育を紹介した。オーストラリアでは自分のアイデンティティを維持しながら、他文化の人と円滑で快適なコミュニケーションができることを目指す文化教育が行われている。アメリカでは、人々の生活習慣や慣習と文化産物をしっかり観察したり体験したりし、さらにはそれについての分析・討論を通して背後にある人々の考え方などの理解を目指す文化教育を目指している。

メアリー・グレース・ブラウンング（2000）は、英国のカウンティ・アッパースクールでの「見る・聞く・考える・やってみる授業」の例を紹介している。メアリー氏によると、生徒の視野を広げ、異なる文化、民族、社会を理解し認め、自分の生活に直接関わりのあるものであることを理解させることが文化授業の大切なこととする。

以上の先行研究から各々の国が、教師が教える文化教育ではなく学習者が自ら気づき考える文化教育を目指していることを窺い知ることができる。

### 3. 日本文化教育が目指すもの

言語教育の中で、文化は変わらない固定的なもので個々の事象を教師がまとめて学習者に教え込むものではないと捉えるのはもはや主流となっている。学習者は文化の知識を身に付けることによってその文化に対応できるようになるわけではないのである。

細川（2002）はかつて日本語教育のあり方について「物事や事柄を知識情報として学習することではなく、自分の考えていることを的確に表現することである」と主張し、それまでの日本語教育の理論的かつ実践的な分野に大きな影響を及ぼした。そして、久保田（2012）は日本国内の日本語教育が文化を知識体系として教え込む傾向から学習者のアイデンティティ構築へ視点移行したとし、日本国外の日本語教育においても文化に内在する社会・政治・経済・理念の要素に気づき、自分達の身近な社会とどう影響しどう関わるかを考えさせる複眼的な文化教育を目指す必要があると指摘している。

本稿は、細川氏の提唱した日本語教育のあり方や久保田氏の指摘した目指すべき日本文化教育のあり方を支持する。学習者に日本文化のある事象を提示し、学習者自らがそれらを観察しながら考えることを通してその背後にあるもの、自分達との関わりまでを理解しようと

する姿勢を育てる教育、それが目指すべき日本文化教育のあり方であると考えている。

#### 4. 日本語教師に求められるもの—インドネシアバリ島の事例

2016年11月に国際交流基金が発表した『2015年度海外日本語教育機関調査結果』によれば、137の国・地域の16,167の教育機関で3,651,715人が日本語を学習している。2012年の調査結果と同様、韓国、インドネシア、中国が学習者数の多い上位国に並ぶ。各国の国内における外国語政策や教育課程の改定、または少子化現象に影響を受け、2012年の調査時より学習者数が減少した国もあるが、その他の85カ国・地域では約20%増を示している。

インドネシアでは、日本に対する文化的関心などから日本語を履修する学生が増え、とりわけ高等教育機関では2012年の結果より25%以上増加したと報告されている。

高嵩 (2016)<sup>2</sup>によると、インドネシアバリ島の日本語学習者は日本に対して好印象を抱いており、「日本語に興味がある」、「日本の伝統文化に興味がある」、「日本のマンガ、アニメ、J-POPが好き」、「日本への観光・留学に興味がある」とされる。しかし、多くの学習者が「日本人と日本語で会話する機会がない」、「日本の文化について分からない」などを学習する上での困難点として挙げている。日本語学習者の日本文化理解に関するニーズに伴い、当然ながら日本語教師に求められるものも多様化する。まずは、教師の現状を知るためにインドネシアバリ島の日本語非母語話者教師<sup>3</sup>を対象に指導上の困難点を調査した。

調査は、2015年6月から9月までの間にアンケートとインタビューによる形式で行った<sup>4</sup>。バリ島の大学・日本語専門学校・高校で日本語を教えている非母語話者教師37名を対象に日頃日本語を教える上で感じる問題点は何かを質問した。

〈表1〉に日本語教育に携わった教育経験の年数と日本での留学経験（短期留学を含む）についての結果を示す。

〈表1〉日本語教師の教育歴と日本への留学経験（短期留学を含む）

教育歴			留学経験	
5年未満	5～10年	10年以上	ある	なし
7名	16名	8名	12名	19名

アンケート調査結果（31名）による

〈表1〉で分かるように約半数が5～10年の中堅教師であり、多くが日本での留学経験を有しない。教師自身がスキルを上げるためにどのような活動をしているかという質問に対して「勉強をして日本語の練習をしている」、「CDを聞いて復習している」、「会話練習をしている」、「言葉と文法を勉強している」、「友達と相談してインフォメーションを探す」、「日本語の研修会に参加する」などと回答した。特に高校の教師は、月一度計画を立てて日本語教育研修会を開き、指導法・日本文化などについて話し合いをしているとのことであった。

日頃授業を行う上でどんな問題点があるかという質問については「日本語の参考文献・教材が少ない」、「学習者のレベル差がある」、「学習者の学習意欲が乏しい」、「日本文化の教え方が難しい」、「答えが分からない質問が出た時の対応が困る」、「教材を作る時間がない」、「学生の理解力不足」、「実際の例をあげて説明することが難しい」、「文字や発音を教えにくい」、「新しい言葉・アクセント・文法・方言などの説明が難しい」というアンケートの記述と、「日本文化の短歌、百人一首を教えたくても短歌を詠むことが難しい」、「同音異義語の説明が難しい」、「祭り等で授業の休みが多くなる」、「時間数が少ない」、「言葉をどのように教えたらいいか戸惑う」、「古語の意味が理解できない時がある」、「教材や参考書が足りない」、「日本人と話す機会がないので覚えている知識をスピークアウト出来ない」といった悩みをインタビュー調査では漏らしていた。

バリ島の日本語教師が抱える問題点は、指導者としての経験や専門分野の違いによって多種多様である。これらは日本語母語話者教師を含む日本語教師の少なさ、設備や教材の不足、政府レベルの教師養成・教育プログラムの不十分さなどが原因ではないかと推測する。そして、前掲した日本語教師達の回答例にもあるように、日本文化に対する知識や理解を深める機会が少ないのは、教師も学習者と同様である点を看過してはならない。

門脇（2013）によると、日本語非母語話者教師は文化を取り入れる授業に対して「学習者の学習動機や日本文化への関心が高まる」、「生きた教育になる」、「覚えやすい」、「学習内容が多様化される」というメリットがある反面、「日本語のスピードが速すぎる」、「授業の準備が大変」、「いい教材がない」、「評価が難しい」、「教材を使いこなせる機会を作るのが難しい」という授業運営の困難点を同時に挙げていると指摘している。また、北村（2011）の調査では、海外の日本語教師が教えたいのは、集めやすい知識や情報から工夫したものや日本のアニメ・映画などを利用したものであるが、学習者達が知りたいのは、同年代の日本人の日常生活や同年代の日本人の考え、悩み、心理や情報の背景となる歴史・技術・人間などである。つまり、文化学習を巡り、学習者と教師間にギャップがあることを指摘している。文化授業では、単なる抽象的で事実上の事柄ではなく、それらの背後にあるものを扱うことが求められているのである。

日本語教師に求められる能力は日本語の一般的な知識だけでなく、社会、文化、地域はもちろん、物事と言語との関わり方などにまで多岐にわたる。文化についても、日本の祭りや茶道、書道などといった伝統文化だけでなく、異文化を読み解く能力を教えることまでが求められる。

次章では、これまでの内容を踏まえた実践授業の事例を取り上げ、海外の日本語学習者を対象にした日本文化授業の可能性を探りたい。

## 5. 実践授業

### (1) 授業の概要

実践授業は、インドネシアバリ島の北部に所在する国立ガネシャ教育大学日本語学科に協力を得て2016年3月14日から17日までの3日間と同年9月13日から14日までの2日間にかけて全5回実施した。3月と9月の2回に分かれて実施したのは、現地大学の日程の都合によるものであった。授業に参加したのは、同大学日本語学科3年生の学生66名であるが、授業運営の便宜を考慮してレベル別にA組とB組の2クラスに分けて<sup>5</sup>リピート授業を行った。1回の授業時間は100分であった。A組は日本語能力のより高い学生達38名で構成され、その中にはN3級所持者が3名含まれていた。B組は日本語能力のより低い学生達28名で構成された。

授業を行う上で、3章で述べた「文化」を意識し、以下の5点に注意した。

- 1) 参加交流型の授業を組み立てる。
- 2) 日本と自国を比較しながら考えさせる。
- 3) 自分の住んでいる環境に目を向けさせる。
- 4) グループ活動と一斉授業を交互に行う。
- 5) 日本語での発言の機会をより多く設ける。

### (2) 授業の流れ

毎回の授業開始時には学習計画を提示し、学習者が学習目標を認識できるようにした。その後、教師の説明や全体練習、グループワークを行った。授業の中盤もしくは後半には、その日の学習内容に関連する文化を体験型にして取り入れた。体験したことについてグループで話し合い、全員がその内容を日本語で話す時間を設けた。グループワークや話し合いの活動を通して他人の考えを受け入れること、自分の考えを主張・発表することでコミュニケーション能力を鍛えた。授業終了時には振り返りシートを配り、その日の授業について自己評価と教師のアドバイスや評価などを整理させ、学習者自らが自分の考えの変化や成長を自覚できるようにした。

### (3) 授業中の活動

第1回目 [学習目標と内容] 自己紹介をしよう。そして自分の国を紹介しよう。

- ① 教師の自己紹介（自己紹介の見本を見せる）
- ② 仕事・住所・家族・出身・趣味について話す
- ③ グループ内で互いに自己紹介をする
- ④ インドネシアとバリについて話す
- ⑤ 日本について質問する
- ⑥ ジャンケン大会（1対全員、グループの勝者対教師などパターンを変える）

第1回目の授業では、日本語で自分のことを話せるようにする、日本語で発言することに慣れることを目標にした。最初の教師の自己紹介では、あえて名前以外の情報を与えなかった。学生から他に何を知りたいか質問させることにより、自己紹介で何を言えばいいのかを考えさせた。それが同時に発言の機会を多く持つことに繋がった。また、グループに分かれ、互いに自己紹介をすることにより全員が日本語で話すことが出来た。多くの学生達が最初は日本語で発言することに緊張していたが、グループワークを行ったことでリラックスしてきた。最後に日本のジャンケンについて説明し、実際にジャンケン大会を体験させた。ジャンケン日本の日常でよく使われる身近で簡単な遊びであり、体を使いながら言葉を覚えやすいという理由から選んだ活動である。

第2回目 [学習目標と内容] 日本語について学ぼう。

- ① 日本語について知っていることは何か考える
- ② 漢字、カタカナ、ひらがなについて理解する
- ③ 小冊子・広告を見ながらカタカナを拾ってみる（グループ活動）
- ④ インドネシア語の語順と日本語の語順の違いについて考える
- ⑤ 紙飛行機を作って飛ばす
- ⑥ 365日の紙飛行機の歌を歌う

第2回目の授業では、日本語そのものについて理解する、自国語であるインドネシア語との違いに気づくことを目標にした。最初に漢字、カタカナ、ひらがなについて簡単に説明した後、日本の新聞に入っている折り込み広告を用いてグループワークし、それを見ながらどんなところにカタカナが使われているか話し合わせた。興味を持たせ、漢字・カタカナ、ひらがなの使い分けについて理解させることができた。また、日本の季節が楽しめる小冊子を用いて文章に使われる漢字の多さに触れさせた。次に、日本語とインドネシア語の大きな違いについて話し合わせた。主語・述語の語順の並び方の違いを話し合うことで、日本語はセンテンスを最後まで聞かないと時制がはっきり分からない場合が多いことを理解できるようにした。最後に「365日の紙飛行機」



写真1 紙飛行機を飛ばすために一列になって構えている様子

を教え、一緒に歌った。歌を取り入れたのは、インドネシアの若者が日本のサブカルチャーにとっても強い関心を持っているからである。この曲は、前向きで明るい歌詞と曲調から日本でもよく歌われている。歌詞の説明をし、映像を見ながら全員で一緒に歌った。また、折り紙で紙飛行機を作って飛ばす競争をした。みんなが笑顔で楽しく参加できた。

第3回目 [学習目標と内容] 日本の四季・行事について知ろう。

- ① 日本の四季とインドネシアの気候の違いを話し合う (グループ活動)
- ② 季節の花・自然について知る
- ③ 四季の出来事・行事について理解する
- ④ お年玉とおみくじの紹介をし、記念に日本のコインをプレゼントする
- ⑤ バリの行事・祭りについて発表する
- ⑥ 盆踊りを体験する (体系を変え全員で活動)

第3回目の授業では、日本の四季について話し合い、インドネシアの気候と比較することを目標にした。日本の四季の移り変わりや季節ごとの行事について並行して紹介した。グループに分かれ、好きな季節と好きな理由について話し合った後、発表させた。学生達からは春に人気が集まり、一度は桜の花を見たいとの声が上がった。雪の体験がないインドネシアの学生にとって日本の冬は、春に



写真2 一休さんに合わせて盆踊りを踊っている様子

並ぶ好きな季節であった。また、バリの行事や祭りについて発表させ、日本との違いについて話し合いをさせた。最後に、一休さんに合わせて夏に行われる盆踊りをみんなで踊った。一休さんの歌詞・踊りは簡単で親しみやすいため、みんなが楽しく参加していた。

第4回目 [学習の目標と内容] 日本の都市について知ろう。

- ① 日本地図を見ながら日本の都市について話し合う
- ② 訪れたい都市とその理由、その都市の魅力について話し合う (グループ活動)
- ③ インドネシアの観光地について話し合う
- ④ 広島について詳しく理解する
- ⑤ 平和の象徴の鶴を折り紙で折る

第4回目の授業では、日本の都市について知る、インドネシアの都市を紹介する、都市の

魅力について話すことを目標にした。日本の地図を見ながら、学生達の好きな都市・訪れたいところなどを話し合い、グループ活動を通して、全員が日本語で発言できるようにした。彼らが日本に抱いているイメージは素晴らしいものであることが発言から読み取れた。最後に広島を取り上げた。その理由は、学生達が歴史の授業で学習した経験があったので理解を深めやすいと思ったからである。



写真3 折り紙で鶴を折った時の様子

オバマアメリカ前大統領が広島を訪れた時、折り鶴を原爆会館に残した話をし、鶴が平和の象徴であることを説明した。また、1943年に広島で生まれ被爆し白血病で亡くなったある女性についての話を紹介した。最後にみんなで折り鶴を折って平和について考えさせた。

第5回目 [授業の目標と内容] 日本の文化について話し合おう。

- ① 様々な日本文化について話し合う  
例 漫画・カラオケ・日本食（たこ焼き、お好み焼き、寿司、ラーメン、）・お花・お茶・歌舞伎・書道・折り紙・コマ・けん玉・着物など
- ② 興味ある日本文化は何かについて話し合う
- ③ 好きな日本文化は何か、理由も合わせて発表する（グループ活動）
- ④ お茶の体験をする
- ⑤ いろはかるたを体験する（グループ活動）
- ⑥ インドネシアの文化について話し合う
- ⑦ 盆踊り（365日の紙飛行機・一休さん）を全員で踊る

最後の授業では、様々な日本の伝統文化や現代文化についてみんなで話し合わせた。どんな日本文化を知っているか質問させた。書道・華道・茶道・マンガ・着物など様々なものが挙げられた。その中でいろはかるたと茶道を体験させた。かるたは、少々内容の難しいところもあったが、6～7人のグループに分かれて楽しく取り組めた。学生達はかるたに強い関心を寄せてきた。茶道体験については2～3人だけの体験に留まったが、日本茶を飲む機会を作った。日本茶を飲んだ学生には感想を発表させた。最後に第2回目の授業で歌った「365日の紙飛行機」に合わせて盆踊りを踊った。歌を覚えて歌える学生も数人いた。全員で楽しく踊ることが出来た。

## 6. 実践から見てきたもの

クラス別の様子については、A組、B組ともに楽しく授業が流れた。振り返りシートに書かれた学生達の声は分かりやすかった、理解できたとのコメントが大多数であった。現地大学の担当教員から、B組の日頃の授業に取り組む姿勢について授業中の発言が少なく参加度が低いことを事前に聞いていたので、授業がスムーズに進むかどうか不安もあった。最初の数分間は、当然ながら両組ともに発言が進んでできなかった。しかし、徐々に緊張が解れ一人一人が自分の考えを発表できるようになってきた。A組には、最初から積極的に授業に参加する学生が数人いたが、次第に慣れてくると他の学生達も目が輝き始め、全員が発言するようになった。B組の学生も笑顔で授業に参加し、発言も徐々に増えていき、全員が発言できるようになった。もちろん、A組とB組とでは、授業中の発言の量、興味の持ち方、日本語能力試験への取り組み方、学習後の復習有無などの面で違いがあった。A組は、もともとの会話能力がB組より高いこともあってグループ活動などが活発に行われていた。また、座敷わらしはいるのか・幽霊を信じるかなどの質問をしてきた学生や日本のかるたに興味があるのでかるたが欲しいと言ってきた学生、授業後に家に帰ってインターネットで日本の都市について確認したと報告してきた学生がいるなど、日本文化に関する関心度の高さを強く感じた。B組の学生中の2～3人は、日本語での発言力がある程度あったが、大多数の、特に男子学生の場合、最初は日本語で話すことが苦手そうだった。実践授業を通して得られた学習効果として、A組はより高い知識を得ようとする態度が養われたこと、B組は日本語で話すことの緊張感が取り除かれ抵抗なく学習できるようになったことではないかと考える。

授業中の活動については、自己紹介において全員の前では進んで発言できなかった学生達もグループ活動になれば笑顔で自分の家族や趣味、出身などを話していた。少しでも日本語で発言する機会を設けることにより各自が持っている日本語能力を伸ばすことができる。何よりも自信を持たせることがスキルアップに繋がると考える。いかにして発言の場を多く作るのが大切である。

日本文化として歌・折り紙・盆踊りを授業の中盤・後半に取り入れた。紙飛行を作り飛ばす前には、J-popの歌を練習し曲の歌詞を理解させた。そして、紙飛行機を飛ばす競争では歓声が上がり授業が盛り上がった。また、盆踊りを踊った時も楽しそうに取り組んでいた。特に一休さんの曲では、簡単な振り付けとテンポの良さのため笑顔でみんなが参加した。日本文化を授業の中に取り入れ、体験させたことで学習者の学習意欲を高まらせ、ひいてはそれが学習者の能力アップに繋がると考える。

グループ活動を入れ、日本語で話し合う場面を作ったことにより、自分の意見を言えることができ、満足感を学生達から感じ取ることができた。また、学生のアンケートからは「よ

く理解できた」、「日本に対して聞きたいことが増えた」、「楽しく参加できた」、「もっともっと知りたいと思った」との回答がほとんどであった。

そして、毎回の授業後、学生達にはリフレクション活動をさせた。どんな勉強をしたか、理解できたか、質問したいことは何か、何を発表したか、誰の発表がよかったか、楽しかったかという問いを投げかけることで自分の学習を振り返らせた。

実践授業が終了した後、学生達に授業の方法・理解度などについてインタビューした結果、「説明が分かりやすい、優しい言葉で説明してくれるので理解しやすい、全ての学生に対して気を配っている」などの評価が返ってきた。また、「普段発言しない学生も積極的に参加して発表していたから驚いた」という声も多くあった。

また、「日本ではどうして折り紙をするのか」、「いつどんなことで折り紙が始まったか」、「カツ丼のようにカタカナと漢字が合わさった単語があるのはどうしてか」、「シガラジャ<sup>6</sup>についてもっと調べて紹介したい」、「インドネシアのことを紹介してみても勉強になった」、「日本人が外国人の嫌う面は何か」、「日本の教育はインドネシアとどう違うか」、「日本の大学生は夏休みに何をするか」、「日本の若者も盆踊りをするか」、「どうして日本人は辛い食べ物が嫌いかなどなど、授業回数を重ねるにつれて、授業で学んだことをさらに追究したい意欲が見受けられる質問、自文化に目を向けさせていることが分かるコメント、日本人や日本をさらに理解したい気持ちが伝わる質問などが増えていくことが確認できた。そして、インターネットなどを通じて気になることや知りたい日本について自ら調べていく様子も見られた。

授業を参観した現地大学の教員は学生達の授業参加態度の変化に驚いていた。普段発言しない学生達が発言できることに感動と驚きの言葉を口にした。また、グループワークや参加型活動をさせる、学生にどうしてなのかを考えさせ、意見交換させるなど、アクティブラーニングの手法を取り入れた指導方法が大いに参考になったと高く評価した。教師の活動や説明をしっかり観察する、学生が活動する、他人の意見や発表を聴く、自分のことを考えるといった活動を盛り込み、授業のメリハリをしっかりつけた点、個人で活動する時とグループでの活動を取り入れることにより一人一人が生き生きと日本語学習に参加できることを学んだと言っていた。

自分の身の回りのことに目を向けさせ、自分の持っている文化をスピークアウトできるように質問を投げかけながら授業を進めていったことが学習者にとって日本語での発言に自信を付けさせ、学習意欲の向上にも繋がったと考える。

## 7. 反省点と課題

日本文化を中心に学生達が主体となって交流・参加できるアクティブラーニングの授業を

試みた結果、学習者の興味・関心を高め、学習への自信を付けることができたと考えられる。しかし、今回の実践は日本語母語話者教師によるものである。海外の日本語教育の現場の主たる指導者はやはり非母語話者教師である。今回の実践授業を通して海外の日本語学習者に対する有効な日本文化教育の実現可能性を見出すことはできたと思うが、非母語話者教師がいかにして生きた文化の授業を行えるか、そしてどのようにして母語話者教師がそれをサポートできるかが今後の重要な課題となる。

このような授業実践を積み重ねていくことにより、教師間の意見交換、情報交換、実践例の収集ができ、授業デザインの理論的な体系化に繋がるのではないかと考える。そして、有効的な非母語話者教師向けの教授法研修プログラムの開発と促進も必要となってくるであろう。最後に、今回の実践授業では、アクティブラーニングを取り入れた文化授業を通して学習者の学習効果向上の可能性を探ることができた。しかし、その有効な評価方法を検証するところまでには至らなかった。反省点として残る。今後、文化授業におけるポートフォリオやルーブリックの活用方法を検討していきたい。

## 註

- 1 2012年に中教審から「新たな大学教育の質的転換に向けて」が出され、高等教育における教育方法の改善が強調されるようになり、効果的な学修法の導入が課題化された。その中でもアクティブラーニングは、教員からの一方的な知識の伝授ではなく、学習者が主体的に問題を発見し解を見出していくことで知識が定着しやすく、学修目的を明確にしやすい学修方法として注目されている。
- 2 インドネシアバリ島の大学生・日本語専門学校生・高校生628名を対象に実施した日本語学習に関するアンケート調査。
- 3 国際交流基金（2013）によると、インドネシア全土の日本語教師数は4,538人で、そのうち日本語母語話者教師は204人である。この数値は日本語教師全体の4.5%を占め、学習者数の多い上位20カ国中の最下位である。また、教師1人あたりの学習者数は192人で世界平均62.5人に比べて高い数値を示している。高嵩（2016）の調べによると、バリ島の高校・大学の日本語教師数は2015年現在260名であり、そのうち、日本人母語話者教師は2名である。
- 4 アンケート調査：大学17名、日本語専門学校3名、高校11名、計31名  
インタビュー調査：大学4名、高校2名、計6名
- 5 レベルの判断基準は、現地大学独自の評価によるものである。
- 6 ガネシャ教育大学が位置する町の名称。

## 参考文献

- 石井敏・久米昭元（2005）『異文化コミュニケーション研究法』有斐閣ブックス  
 Evi Lusiana・尾崎裕子・秋山佳世（2013）「インドネシアの中等教育における日本語教師研修インストラクターの養成」『日本語教育紀要』9 国際交流基金  
 小嶋栄子（2016）「事例報告—「日本語教授法」におけるアクティブラーニングの試み—日本事情

- を留学生に教える」『短期高等教育研究』6 短期大学コンソーシアム九州
- 門脇薫 (2013) 「映像作品を利用した異文化理解のための日本語教育」『日本学刊』第16号 香港日本語教育研究会
- 北村武士 (2011) 「日本事情・日本文化を取り入れた日本語授業を考える」『日本事情・日本文化を考える』国際交流基金教授法シリーズ ひつじ書房
- 久保田滝子 (2012) 「日本語教育における文化」『アメリカにおける日本語教育の過去・現在・未来』国際交流基金
- 河野理恵 (2010) 「中国の大学における日本文化に関する授業の現状—上海の大学の調査から—」『一橋大学国際交流センター紀要』1
- 国際交流基金 (2013) 『海外の日本語教育の現状』くろしお出版
- 国際交流基金 (2016) 『2015年度海外の日本語教育機関調査結果 (速報値)』電子版
- 澤井康子 (2000) 「文化を取り入れた日本語授業」第二回フランス日本語教育シンポジウム
- 三田弥生 (2001) 「日本事情」における「文化」の異なる視点：細川秀雄氏による「文化」へのアプローチ理論」『昭和女子大学大学院日本語教育研究紀要』1
- 鈴木貴美子 (2006) 「日本語教育における「日本文化」についての理論的・実践的考察：クリティカルベタゴジエの視点から」『ICU日本語教育研究』3 国際基督教大学
- 高嶋幸子 (2016) 「バリ島における日本語教育—オンラインを介しての日本語教育の効用—」『International Conference on Japanese Language Education』ICJLE-Bali Conference
- 浜田美和 (2014) 「日本語教育プログラム：総合日本語コース報告」『富山大学国際交流センター紀要』1
- 古川嘉子・木谷直之・布尾勝一郎 (2015) 「インドネシアの高校・大学日本語教師への質問紙調査に見る日本語学習の意味づけの変化」『国際交流基金日本語教育紀要』11
- 細川英雄 (2002) 『日本語教育は何をめざすのか』明石書店
- 細川英雄 (2002) 『ことばと文化を結ぶ日本語教育』にほんごの凡人社
- 松岡晶和 (2012) 「香港の大学における日本文化に関する授業の現状」『一橋大学国際教育センター紀要』3
- 松川良隆・大島康子・松下安智 (2013) 「日本文化理解と言語習得の一方法」『日本語教育方法研究会誌』20 (1) 日本語教育方法研究会
- 松本剛次 (2014) 「インドネシアの中等教育改革がめざす「能力 (コンピテンシー)」とその育成」『日本語教育』158
- 水谷修・李徳奉 (2002) 『総合的日本語教育を求めて』国書刊行会
- 三代純平 (2012) 「韓国の大学における日本文化授業に関する現状」『徳山大学論叢』第74号
- メアリー・グレース・ブラウニング (2000) 「日本語の授業に文化を取り入れて」『国際文化フォーラム通信』48
- 森山新 (2009) 「文化を取り入れた総合的日本語教育のための新たなとりくみ：国際交流型授業と国際遠隔共同授業」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書』お茶の水女子大学
- 渡辺文夫 (1995) 「インドネシアと日本人」『異文化接触の心理学』川島書店

## 謝辞

本稿における実践授業は、インドネシアガネシヤ教育大学日本語学科の先生方および学生の皆さんの多大なご協力によって実施できたものである。ここに改めて謝辞を記したい。